

# 動画視聴形式のオンデマンド型授業におけるコミュニケーション

南川慶二

(徳島大学教養教育院)

## 1. はじめに

2020年度前期に始まった新型コロナウイルス感染対策により、遠隔(オンライン)授業を実施する機会が増加した。本稿執筆時点の2021年度後期には対面授業もある程度復活しているが、受講者数が多い場合など、十分な感染対策が困難な科目では遠隔授業が継続されている。昨年度の当カンファレンスでは、大人数のオンデマンド形式授業において実施可能なアクティブラーニング授業の実践例を紹介した。これは、LMS(manaba)のレポート提出時に学生同士が提出物を相互に閲覧できる機能を用いたものである<sup>1)</sup>。オンデマンド授業の受講者は、自分以外にどのような学生が参加しているのか把握できず、孤立した状況になりがちである。前報のミニレポート相互閲覧とコメント機能を利用した方法は、リアルタイムでの意見交換はできないが、テキストベースの対話によりアクティブラーニング的要素を取り入れることができた。これによって学生同士及び学生と教員とのコミュニケーションを促進することが可能であることがわかった。今回は、相互閲覧の対象を小テスト解答に適用した例と、学生とのコミュニケーション手段として小テストの解答例や質問への回答を動画として公開する方法を試みた結果を報告する。

## 2. オンデマンド型遠隔授業の実施

昨年度に報告した「消費者が主役の社会へ」については、オンデマンド実施形式を一部見直し、消費者庁職員等が交代で担当する回で担当講師の希望に応じてMicrosoft Teamsを用いたライブ形式に変更した。筆者が担当した2回はオンデマンド形式で継続したが、今回は徳島大学に導入された講義動画収録システムで作成した動画閲覧形式に変更した。また、ミニレポートの相互閲覧によるアクティブラーニング実施方法も見直し、小テストの解答一覧を氏名を伏せて公開し、一覧表の中から注目した意見を引用してレポートを

作成する形にした。この方法は、2021年度に新しく開設した教養科目にも適用した。

2021年度に筆者が新設した科目は、前期の「身近な高分子物質の科学と技術」と後期の「生命現象・生体材料とバイオメテックス」である。これらは感染対策のためにオンデマンド形式で開始し、数回経過した後にオンデマンド形式を継続するか対面授業に移行するかについてアンケートを実施した。その結果、オンデマンド形式の継続を希望する学生が多く、医学系を含む全学部の学生が参加することも考慮して、オンデマンド形式で続けることとした。

オンデマンド授業の設計にあたり、新しく導入された講義動画収録システムを活用して準備を進めた。講義動画を収録した後、必要に応じて動画ファイルを編集し、動画配信サイト(YouTube)にアップロードした。各動画へのリンクをmanabaに掲載し、受講者が各自で講義動画を視聴する方法である。視聴後にmanabaの小テストに解答を提出することで出席(平常点)として成績評価に加えることを周知した。また、動画で説明に使った資料はPDFなどのファイル形式でmanabaに掲載した。

講義動画視聴形式では対面授業のように講義中の学生の様子を見ることができず、一方的に話すだけでは手応えを感じられない。受講者が動画を確実に視聴したことを確認するのも困難である。そのため、「身近な高分子物質の科学と技術」では毎回manabaで講義内容に関連する小テストを実施して、内容を理解しているかを確認した。また、小テストの設問の最後に自由記述欄を設け、質問や感想、講義に対する意見などを自由に書き込むように指示した。最終成績は、これらの小テストを50%程度、3回のレポートを50%程度として評価することをmanabaに掲載するとともに、講義動画のガイダンスでも説明して受講者に周知したことから、小テストの解答提出率は概ね良好であった。

### 3. オンデマンド型におけるコミュニケーション

小テストは記述式の設定を中心として、理解したことを自分なりに文章として表現させることを重視した。アクティブラーニングとして他者の意見を引用することを義務付けたことで、学生同士の意見交換がオンデマンド形式でも実施可能になった。ミニレポートを共有してコメント欄に意見を記入する方法と比べて、匿名の解答一覧から引用する形式では気兼ねなく多数の意見を比較・引用できるため有効であることがわかった。

自由記述形式で文章を書く際には様々な疑問が生じることが多い。解答欄のすぐ下に同じような自由記述の質問記入欄を設定することで、解答の際に感じた疑問点をすぐその場で記入して質問できるため、積極的に記入する学生が多くなった。当初は解説や質問への回答を文書にまとめてアップロードすることを計画していたが、講義動画の作成に時間を取られてフィードバック文書をまとめる時間的余裕が少ないことが多々生じた。そのため、講義動画収録時に別の動画として小テストの解答例や質問を画面に表示して口頭で説明することにした。試行錯誤の後、manabaの小テスト解答を一括ダウンロードしたファイルを一覧表形式で画面に表示しながら解説動画を収録する形になった。これにより省力化しつつ効果的にフィードバックを実施できた。

質問への回答を動画で行ったことについては、学生のアンケートから好評であることがわかった。具体的な記述を原文のまま引用すると、例えば「学生からの質問に対する説明がとても丁寧でよかった。」「オンデマンドだったので自分ペースで勉強できた。また、質問の答えも丁寧に動画にしてくれていたのでもよくわかった。」などである。受動的な講義受講に慣れていると質問することに消極的になりがちであると思われるが、前期の「身近な高分子物質の科学と技術」に関しては毎回の質問が非常に多く、回答と解説の動画だけで90分講義の三分の一にあたる30分程度を使うこともあった。予定の講義内容を短縮するなど、当初の計画を変更しながら対応した。初めて開講した授業であり、講義動画をすべて一から作りながら進めていたため、計画を柔軟に変更することが可能であった。そこで、教科書に沿って説明する予定であった部分を、質問に回答しながら説明で

きるように小テストに予習の内容を含めることも試みた。小テストに記述式で解答し、疑問点をすぐ下の質問欄に記入させた。その結果、予定の内容に関する質問が多数集まり、回答動画が講義の導入になった。この方法で予習と質問を促す形式ができあがり、理解度の向上につながった。

後期に実施中の「生命現象・生体材料とバイオミメティクス」では、質問欄に何も記入しない学生が前期の授業よりも多い傾向が見られる。内容が異なり、受講者の学部学科分布も異なるためかもしれないが、前期の授業を経験して大学の講義に慣れたことで「手抜き」が一部にあるかもしれない。質問を義務付けられないと積極的に記入しない原因として、講義内容に興味を持たずに学習意欲を失っている可能性も考えられる。質問しようという意欲を持たせるためには、内容や説明を工夫することも必要である。一つの方法として、前期の授業から実施しているのは、「雑談」の動画作成である。講義内容に少し関係する雑談だけの動画を講義の一部とした。この動画は視聴を義務化せず、「興味のある人だけ見てください」という注釈を加えた。熱心に視聴した学生からは好評であり、質問も積極的にする傾向がみられた。

### 4. まとめ

動画視聴形式のオンデマンド型の講義において学生とのコミュニケーションを実現する方法として、小テストやレポートへのコメントなどのフィードバックを講義動画として作成した。文書ファイルよりも動画として視聴できる方が効果的であることがわかった。また、前報のミニレポート相互閲覧によるアクティブラーニングの実施方法を見直し、小テストの解答一覧を公開してレポート作成時に引用することで意見交換の場とした。アンケートの結果、多くの学生からこれらの方法が良かったという感想が得られた。

### 参考文献

1. 南川慶二, ミニレポート相互閲覧を用いたオンデマンド型アクティブラーニングの試行, 第16回大学教育カンファレンス in 徳島, B4, 2021.